



企業編

宝工業株式会社 大分工場

安岐町馬場892番地1
開設：平成24年12月
従業員：32名



創業者の壺口正信さんは、樹脂加工の技術を学び、大阪府において昭和60年8月に樹脂部品を成形する宝工業株式会社を設立しました。樹脂部品は、金属部品に比べ単価は安く、1つの会社からの受注数は少ないことから、取引する会社を増やしていく必要がありました。そこで、「機械設備が充実しているところに仕事が入る」との理念の下、機械設備の導入に力を入れる一方で、医療機器メーカーをはじめとする多分野のメーカーに営業を行っていききました。また、樹脂部品を扱う大手商社との取引も始まり、順調に事業を拡大していきま

での工場では生産が間に合わなくなり、平成24年に奥さんの地元である安岐町に大分工場を設立しました。大分工場は、地元採用者5名を含めた6名で始まり、未経験の若者を主に採用したので、オペレーターとしての技術を磨いてもらう必要があります。そこで、本社で大量生産していた簡易な部品の製造から始めました。その後、大型機械の設備を導入したので、大型の部品や大量生産する部品の製造も担うようになりました。また、隣接する宮崎県や熊本県、福岡県の会社との取引が始まり、順調に業績を伸ばしてきています。現在、大分工場は、さらなる機械設備の充実をはかるために、来年3月に大型機械を7台導入する予定にしています。しかし、まだ機械設備を拡張させるスペースがあり、若手のオペレーターが揃う大分工場の役割は、ますます重要になってきます。オペレーター一人ひとりが本社のペテランオペレーターのように高度な1点ものに対応できる技術力を持つ必要があると考えています。



第一次産業編

清末 滋さん 優さん

武蔵町成吉
昭和23年から酪農を営む



清末滋さんは、祖父の故政己さんが昭和23年に始めた酪農を平成21年に継ぎました。この頃、北海道で酪農を学んだ後、平成16年から父の健一さんと一緒に働いていました。しかし、健一さんが大分県酪農協同組合の組合長になったため、一人で乳牛の世話をすることになりました。当時高校2年生だった弟の優さんが手伝ってくれたこともあり、父から引き継いだ36頭の乳牛をなんとか維持することができました。しかし、優さんが高校を卒業し、大分県立農業大（豊後大野市）で酪農を学んでいた2年間で、世話が行き届かず20頭まで減ってしまいました。平成24年、優さんが卒業して一緒に世話をすることができるようになると、出荷する牛乳の品質が改善され、搾乳した牛乳のほとんどを出荷することができるようになりました。

りました。そして、徐々に頭数を増やしていき、経営を安定させるために目標としてきた40頭超えを昨年12月に達成しました。また、牛の容姿を競う大分県畜産共進会に、2年前から再び出品しており、平成32年に宮崎県で開催される全国共進会に出場することを目指しています。優さんは、「子どもの頃から牛舎で過ごしてきたので、牛と一緒にいることは自然なことでした。牛には長生きしてもらいたいのので、牛の体をきれいに保つことと、牛に無理をさせないために乳を搾り過ぎないことを兄と決めていきます。酪農家は何でもできないといけないと学校で言われましたが、実践できているのは兄の方で、知識も技術も敵いません。早く追いつけるように頑張ります」。滋さんは、「自分は地域の出事などが多く、牛の世話を弟に任せきりですが、よくやってくれています。いずれはお互いに家庭を持つ中で、一緒に経営していくことになると思うので、いつまでも兄弟で仲良くやっていくために作業分担についても見直していきます」と語っていました。



商工会編

有限会社 みえの装美

国見町竹田津
創業：昭和55年
従業員：4名



創業者の三重野修二さんは、絵を描くことが好きだったので、看板屋になることを決めました。別府市の看板屋で2年間修業し、地元に戻って昭和55年に「みえの装美」を開業しました。当初は、看板製作や塗装だけではなく、簡単な土木作業なども行っていました。別府市や大分市の建設中や看板が古くなった店舗に飛び込みの営業も行いました。そして、「お客さんにとって良い看板は長持ちすること」の考えから、安さを追求せず、長持ちする塗料やカッティングシートを使用してきました。そうした仕事ぶりが徐々に広がり、看板の仕事を増やしていききました。昭和50年代後半には、社会全体の景気が良くなって、トラックや工場施設への大規模なイラストの依頼も入るようになり、自然と仕事が増えていきました。そして、多くの職人を抱えるようになり、従業員の勤務労働条件を改善す

るため、平成6年に法人化しました。その後、地元の仕事が徐々に減ったり、看板製作の機械化が進んだりと環境は大きく変わりました。しかし、以前看板を制作したお店の関係者からの紹介や看板業界の横のつながりで、大手コンビニやドラッグストアなど県外での仕事も入るようになりました。そして、平成27年から大分県広告美術協同組合の理事長に選出され、「大きく伸びよう。手をにぎろう」のスローガンのもと、看板業者の共存共栄を目指しています。修二さんは、「看板業界は機械化が進んできた結果、値崩れがおこり厳しい状況にあります。そうした中で、20年、30年前に作った看板が色あせず設置したお店の方からあなたのところの看板は長持ちするなど喜んでくれるのが何よりの喜びです。これからも、自分の原点であるお客様が喜んでくれる看板作りをしつかりと続けていきます」と語っていました。

